# 校長室より

暗唱だより
令和６年１０月
第三吾嬬小学校長
川中子　登志雄

令和６年度も、折り返し地点にやってきました。前期が１１日に終了し、１５日からは後期がスタートします。前期には、校長室暗唱チャレンジは、五つの作品に挑戦してきました。ここまで全部に合格した人もたくさんいます。今年も、日本語の全作品に合格した人には３月にグランドスラム賞をおくりますので、後期もがんばってください！

１０月の暗唱課題は、中国の漢詩から「偶成（ぐうせい）」に挑戦してみましょう。

## 偶成

「少年老いやすく、学なり難し」で有名なこの漢詩は、中国の朱子学の祖である朱熹の作と言われています。（最近では、作者は別の人という説もあるそうです。）

「偶成」という言葉は、「たまたまできたもの」というような意味で、「思いがけずできた詩」というタイトルがついているわけです。

出だしの「少年老い易く学成り難し（しょうねんおいやすくがくなりがたし）」とは、若いうちはまだ先があると思って勉強に必死になれないけれど、すぐに年月が過ぎて年をとり、何も学べないで終わってしまう、だから若いうちから勉学に励まなければならない、という意味のことわざにもなっています。続く「一寸の光陰軽んずべからず」も同様にことわざとして用いられます。（ウィキペディアより）

３行目・４行目の「いまだ覚めず池塘春草の夢　階前の梧葉　已に秋声」は、普段見ない難しい漢字が使われていますが、意味は「池の堤の春草のなかで見た夢がまだ覚めないうちに、階段の前の青桐の葉には早くも秋の風が吹いている。」という感じで、時の過ぎるのが早いことを例えています。

日本では、昔は、人の身分はどの家庭に生まれるかで決まっていましたが、学問を修めることで、国の重要な仕事に就くことができるようになるという考え方は、中国で古くから取り入れられていました。将来、立派な職に就くために、若いうちに必死で勉強をしたわけですが、なかなか学問を修めるのは大変なことでした。そんな中で、必死に勉強を頑張った人たちが、今の日本の基礎を作ってくれたのですね。

皆さんも、自分の興味のあることはもちろん、いろいろなことを自分で勉強するのを頑張ってほしいと思います。